

御世のこととした可能性もある。したがって、『古事記』『日本書紀』を編纂した当時の学者と同じように、これらの記載を踏まえて、矛盾したところがあってもそのまま伝えるのが日本の正史である。それが歴史書というものである。現代に於いて疑問に思われることは当時においても同じで、関与した学者なり官僚は同じ悩みを持ったはずで、その上でこのように書かざるを得なかったのである。

因みに、外国ではコロンビア大学のオンライン百科事典や米議会図書館には、「古朝鮮は紀元前一二世紀に、支那の殷王朝の政治家・箕子きしが韓半島北部に建てた国だ、その当時、韓半島南部は日本の大和政権の支配下にあった」と書かれている。紀元前一二世紀といえば神武天皇の御世より更に五百年前のことで、この大和政権が天皇の政権か、それ以外の九州あたりの政権かは判らない。外国人は大和政権と同じと見たのであろう。

新羅(半島)の正史『三国史記』に、古新羅第四代王の脱解尼師今だっかいにしきんや大輔の瓠公ここうが倭人であったとあることから分かるように、半島南部は倭人の支配地域だったのである。この事実はこれから後の半島と列島の関係を見る上で極めて重要である。その後の歴史も、この半島の正史『三国史記』や『三国遺事』の記述と符合するところが多い。なお、『三国遺事』は皇紀一九〇〇年代に高麗の高僧の一人によって書かれた私撰の歴史書である。

更に、中華人民共和国でも、上海人民出版社が出版している教科書「世界史講」は、「新羅は、半島南方で早くから長期間にわたって倭人の基盤となっていた任那地区を回復した」と記している。何の根拠もなく記しているとは思われないし、寧ろ当事国の思い入れがないだけ客観性があるかも知れない。中華人民共和国は韓国政府から激しい抗議を受け、戦後の日本紹介部分を全て削除している。因みに、決して書き換えたわけではない。

崇神天皇

第十代 世系一五 在位六八年

皇紀五一三(開化天皇十(前一四八)年、開化天皇の第二皇子として誕生された御間城入彦命みまきいひこのみことで、母は物部氏の祖・大綜麻杵命おほそまきのみことの娘・伊香色謎命いかがしめのみことである。

皇紀五三一(開化天皇二十八)年一月五日、一九歳で立太子される。

皇紀五六三(開化天皇六十)年四月九日、開化天皇が崩御された。

翌皇紀五六四(崇神天皇元(前九七)年一月十三日、皇太子が五二歳で即位される。二月十六日、大彦命の娘・御間城姫を立てて皇后とされる。大彦命は開化天皇の同母兄であるから皇后は従兄妹に当たる。

皇紀五六六(崇神天皇三)年九月、三輪山西麓(桜井市金屋付近)の磯城瑞籬宮しきのみずかきのみやに遷都される。現在この地に纏向遺跡が発掘されている。唐古・鍵遺跡と纏向遺跡を見ると、この頃から都市が唐古・鍵から纏向に次第に移動していることが分かり、この遷都と符合している。

纏向遺跡は次のような特徴を持っている。

- 一、皇紀五六〇年頃現れた計画的都市で、規模は唐古・鍵の一〇倍と日本列島最大である。
- 二、他所からの搬入土器が多く、その産出地は広範囲である。
- 三、生活用具は少なくて土木作業用具が多く、巨大環濠・運河が掘られ、大規模な都市建設工事が行われている。

四、導水施設があり、天皇祭祀施設、天皇関連建物もあつて、吉備の豪族の墓に起源を持った弧帯文の書かれた特殊器台・壺などがある。

五、居住空間周辺に箸墓古墳、それに先行する纏向型前方後円墳がある。

六、鉄器生産が行われている。

以上からこの地は計画的に造られ、人・物が頻繁に出入りする大都市であつたことが分かる。

皇紀五六七（崇神天皇四）年十月二十三日、天皇は「我が皇祖の天皇方がその位に登られたのはただ一身のためではない。神や人を整え天下を治めるためである。だから代々良い政治をされ徳を布かれた。今私は大業を承つて、民を愛み育つこととなつた。どのようにして皇祖の跡を継ぎ、無窮の祚を保とうか。群卿百寮（役人）達よ、汝らの忠良の心を尽くして俱に天下を安らかにすることは、また良いことではないか」と詔された。ここで君民共治（我が国の国体）の国柄を説いておられる。

【疾病の大流行】

皇紀五六八（崇神天皇五）年、疫病が大流行し、多くの民が死亡する。「此の天皇の御世に疫病多に起こり」（古事記）「国民に疫病多く民の死亡する者も半ば以上に及ぶほどであつた」（日本書紀）とある。

皇紀五六九（崇神天皇六）年、疫病を鎮めるべく、天照大神と倭大国魂神（天理市の大神社の祭神）を宮中でお祀りし、毎日祈られた。ところがその神の勢いを畏れ、共に住む「同床共殿」に不安を持たれた。そこで従来宮中に祀られていた天照大神と倭大国魂神を皇居の外に移される。父天皇の命で皇女の豊鍬入姫命が天照大神を宮中から笠縫邑に遷し祀り、以後、皇紀六五六（垂仁天皇二十五（前五））年三月十日に倭姫命と交替するまで祭祀を続け、これが伊勢神宮

の齋宮制度の濫觴となつた。倭大国魂神は皇女の淳名城入姫命に祀らせたところ、髪が抜け身体が痩せて衰弱し、遂に祀ることが出来なくなつた。

皇紀五七〇（崇神天皇七）年二月十五日、崇神天皇の依頼で、孝靈天皇の皇女・倭迹迹日百襲姫命が災害の続く理由を占うと、大物主神が百襲姫に乗り移り、「疫病は自分の仕業である」こと、「自分の血を引く大田田根子の手によって自分を祭ればそれは収まる。そして海の向こうの国も自ら帰伏するだろう」と告げた。

八月七日、夢に貴人が現れ「太田田根子命を大物主の祭主とし、また、市磯長尾市を倭大国魂神の祭主とすれば必ず天下は平く」といわれた。そこであまねく天下に太田田根子を求められ、探し当ててお連れする。

十一月十三日、大田田根子（大物主神の子とも子孫ともいう）を大物主神を祭る祭主とされた（現在の大神神社で、三輪山を御神体としている）。そして倭大国魂神は皇女である淳名城入姫命に代わつて市磯長尾市に祀らせた。こうしてようやく疫病は終息し、平穏が戻り、五穀豊穡となつて百姓は豊かになつた。

【四道將軍】

皇紀五七三（崇神天皇十）年七月二十四日、「教化を四方に布き給うの詔」で「民を導く根本は教化にある。今、神々に祈りを捧げ、災害は全てでなくなつた。けれども遠国の民は、まだ教化に預かつていない。そこで卿等（四道將軍）を四方に遣わして、我が意を知らしめよ」と詔される。

詔に基づき九月九日、父帝・開化天皇の同母兄（伯父）の大彦命を北陸道に、大彦命の子・武渟川別命（従兄弟）を東海道に、孝靈天皇の皇子の吉備津彦命（大叔父）を西道（山陽道）に、開化天皇の子・彦坐王の子・丹波道主命（甥）を丹波道（山陰道）にそれぞれ將軍として遣わし、「まつろわぬものがあれば兵をもつて討て」と詔された。

ところが大彦命が発発して和珥坂（奈良県天理市）に着いたとき、少女が「ミマキイリビコハヤ、オノガラヲ、シセムト、ヌスマクシラニ、ヒメナソビスモ」（御間城入彦よ、貴方を殺そうと時を伺っていることも知らないで、若い娘と遊んでいるよ）と少女の歌っているのを聴き、異変を察知して引き返し、少女の歌っていた歌を倭迹迹日百襲姫命に占わせた。すると孝元天皇の皇子の武埴安彦の謀反が判明する。しかも武埴安彦は山背から、その妻吾田媛は大坂から、ともに將軍達の留守を狙って都を襲撃するという。天皇は吉備津彦命（五十狭芹彦命）の軍を遣わして吾田媛勢を迎え討ち、一方の武埴安彦勢には、大彦命と彦国茸（和珥氏の祖）を差し向かわせ、これを打ち破った。十月には畿内は平穏となり、四道將軍が再び出陣する。

大彦命は孝元天皇の第一皇子で、母は鬱色謎命、開化天皇の同母兄であり、娘の御間城姫命は崇神天皇の皇后で、崇神天皇にとっては伯父であり義父に当たる。福井県鯖江市の船津神社、三重県伊賀市の敢国神社、福島県会津美里町の伊佐須美神社、秋田市の古四王神社に主祭神として祀られている。

武渟川別命は大彦命の子で、崇神天皇にとっては従兄弟である。阿倍朝臣等の祖であり、岐阜市の津神社、結城市の健田須賀神社などに主祭神として祀られている。『古事記』によると、高志（越）の国の平定に向かった大彦命と相津（会津）で出会ったとされ、これが会津の地名の由来という。

吉備津彦命は孝靈天皇の皇子、母は倭国香媛で、崇神天皇にとっては大叔父に当たる。岡山市の備中国一宮・吉備津神社、高松市の讃岐国一宮・田村神社などに主祭神として祀られている。陵は岡山市の中山茶臼山古墳（岡山市北区吉備津）で、規模は崇神天皇陵の半分である。陵の規模は決められていたものと思われる。また、他の三將軍についても陵は存在するはずであるが現在のところ特定されていない。

丹波道主命は開化天皇の第三皇子で異母弟の彦坐王の子であるから甥に当たり、母は息長水依壳媛、娘は垂仁天皇の皇后日葉酢媛である。京丹後市の神谷神社などに祀られている。

皇紀五七四（崇神天皇十二年四月二十八日、四道將軍が地方のまつろわぬ賊軍を平定して帰参し、その結果を奏上した。また、『日本書紀』に「……この年、異俗の人達が多数やってきて……」とあり、これが熊襲だけでなく、朝鮮半島からの人もいたと思われる。大彦命と武渟川別命が会津で会ったとあるので、この二人の將軍は福島県会津まで行ったことが分かるが、その他の吉備津彦と丹波道主が何処まで遠征したかは不明である。

この四道將軍の派遣により、天皇を中心とした大和朝廷の勢力範囲が拡大し、本州主要部を領土とする日本国家の原形が完成する。しかし、この時期に俄に形成されたのではなく、これまでの九代の天皇の御世で徐々に教化が進み、交流も盛んになっていったと思われる。このことは唐古・鍵や纏向の都市から出土した土器などが各地・各方面から搬入されたものであることから分かる。しかも、この四人の將軍が何処かで激しい戦争をしたという記録はない。決して力による征服ではないことがはっきりしている。

皇紀五七五（崇神天皇十二年九月十六日、戸口を調査し、課役を科す。百穀も良く実り天下平穏となり、天皇は御肇国天皇と称えられた。

皇紀五八〇（崇神天皇十七）年秋、詔して、国々に献上物を運ぶ船の建造を命じられる。国家形成が進み、物流や人の移動が盛んになって来たためである。纏向の河川や運河が整備され、大和川を航行し大阪湾に繋がっていたため、物流のための大量の船が必要になった事情を物語っている。そして十月、初めての船舶建造が行われる。これが日本の本格的な造船業の始まりと言える。

【半島で新羅建国】

皇紀六〇三（崇神天皇四十）年、初代新羅王・朴赫居世が朝鮮半島南東部に新羅を建国する。この事実は半島の正史『三国史記』の中の「新羅本記」に書かれている。『三国史記』は高麗第十七代王・仁宗の命を受けて金富軾らが編纂した、三国時代（新羅・高句麗・百濟）から統一新羅末期までを対象とする紀伝体の歴史書であり、朝鮮半島に現存する最古の正史である。皇紀一八〇三（康治二（一一四三））年に執筆が開始され、二年後に完成した全五〇巻の浩瀚な歴史書である。日本と半島との関係を見ていく上では欠かせない資料である。しかし残念ながら『三国史記』が今の韓国では都合の悪い部分を嘘翻訳（漢文→ハンゲル）している。従って韓国人は自分の国の本当の正史が読めないことになってしまっている。嘘の歴史を読まされている。

皇紀六〇六（崇神天皇四十二年）、「新羅本記」に、朴赫居世八年、倭勢力の最初の対新羅出兵があったとの記述がある。これは『古事記』にも『日本書紀』にも書かれていないので、この「倭勢力」が大和朝廷なのか九州あたりの倭勢力なのかは定かではない。しかし書かれている以上出兵はあったものと思われる。

後の皇紀一四一〇（天平勝宝二（七五〇））年頃完成した支那大陸の正史『隋書』の一節には「新羅も百濟も倭国を敬仰し、常に使節が往来している」とある。「敬仰」という言葉を使っており、倭勢力というものが列島、半島、支那大陸の中で大きな存在だったことが分かる。『隋書』も単なる古史書ではなく、隋という一大国の正史である。従ってこれらを素直に読むことによって、当時の大和朝廷を含む倭国の実体が理解できる。

皇紀六一一（崇神天皇四十八）年一月、天皇は皇子の豊城入彦命と活目入彦命（垂仁天皇）の異母兄弟を呼び、「お前達二人どちらも可愛い、どちらを後嗣にするかを決めたい、二人それぞれ夢を見なさい」といわれる。

二人はそれぞれ浄沐（川で身を清め髪を洗う）し祈りを捧げて眠る。夜明けに兄の豊城入彦命は「御諸山に登って東に向かつて八度槍を突き出し、八度刀を空に振り上げました」と申し上げ、弟の活目入彦命は「御諸山の頂に登って、縄を四方に引き渡し、粟を食む雀を追い払っていました」と申し上げる。天皇は夢を占い「兄は専ら武器を用いたので、東国を治めるのが良いであろう、弟は四方に心を配って、稔りを考えているので、我が位を継ぐのがよい」といわれた。

四月、弟の活目入彦命を立てて皇太子とされ、豊城入彦命には東国を治めさせられた。豊城入彦命は上毛野国・下毛野国（群馬・栃木）の豪族・毛野氏の祖となる。この時期、既に東国は大和朝廷の支配下に入っていたのである。崇神天皇十年東海道へは武渟川別命を、北陸道へは大彦命を派遣し東国を服属させていたからである。

皇紀六二三（崇神天皇六十）年七月十四日、天皇は詔して「武日照命が天から持ってこられた神宝が出雲大神宮に収めてあるがこれを見たい」と言われた。矢田部造の遠祖・武諸隅を使わしたが、管理していた出雲振根が九州に出かけて留守だったので、弟の飯入根が皇命を承り、兄の出雲振根に無断でこれを献上した。ところが兄の出雲振根が帰って来て、怒って飯入根を謀殺する。そこで朝廷は吉備津彦命と武渟川別命を遣わして出雲振根を討伐し殺させた。この時期、既に出雲地方も大和朝廷に服属していたことが分かる。

皇紀六二四（崇神天皇六十一）年、夫余の王族である朱蒙（東明聖王）が高句麗を建国する。『魏書』の「高句麗伝」にキリスト暦紀元前一世紀とあるから、崇神天皇の御世である。

皇紀六二五（崇神天皇六十二年）年七月二日、天皇は「農は国の基……池や溝を掘って民の生業を広めよ」と詔され、依網池、荊坂池、反折池を造らせられた。いずれも大阪府南部大和川流域である。もともと、当時の大和川は現在のように西流して堺で外海に出ていたのではなく、八尾市、東大阪市にあった大阪湾（河内湖）に注いでいた。

皇紀六二八（崇神天皇六十五年）年七月、任那国が蘇那曷叱知を遣わして朝貢する。記録に残る半島からの最初の朝貢

である。五年後の垂仁天皇二年に帰国したが、帰国の際に天皇からの賜物を途中で新羅に奪われたために両国の反目が始まる。

『日本書紀』に「任那国は筑紫を去ること二千余里、北のかた海を隔てて鷄林(新羅)の西南にある」とある。律令制では五町をもつて一里としたので、凡そ一千km北で、朝鮮半島の南西部である。この崇神の御世に朝鮮半島で新羅と高句麗が建国され、半島に関する記述が増え、半島との関係が徐々に明らかになる。

大和朝廷はこの崇神天皇の御世で、大八洲を一つの国家のもとにおく天下統一事業を成し遂げた。そして、統一後は、平和で豊かな国家が出来上がったので、その御世を称えて、崇神天皇を「御肇国天皇」という。

皇紀六三一(崇神天皇六十八)年十二月五日、在位六八年、一一九歳で崩御される。山辺道上陵やまべのちののみみさきに葬られた。陵は崇神天皇陵(奈良県天理市柳本町の柳本行燈山古墳、前方後円墳・全長約二町半・二四二m)である。

日本の歴史書では古墳時代を概ね皇紀九〇〇年(三世紀半ば)から皇紀一三〇〇年(七世紀)としているが、この崇神天皇陵が既に巨大な前方後円墳であり、皇紀六〇〇年代(紀元前一世紀)のものである。しかも、一代前の開化天皇陵でも既に相当巨大な前方後円墳である。前方後円墳が造られた時代を古墳時代というのであれば、前述の通り遅くとも開化天皇の御世からと考えなければならない。

しかも、崇神天皇が都を置かれた磯城瑞籬宮しものみずかきのみや(奈良県桜井市金屋)の近くには北の唐古・鍵遺跡の一〇倍規模もある纏向遺跡が発掘され、この地域に存在した巨大都市の規模と内容が次第に明らかにされつつあり、崇神天皇の御世から後の繁栄を物語っている。

この遺跡の発掘はこれから更に進み、この時代の実態を明らかにしてくれることであろう。ここに優れた天皇がおられたことは明らかで、これを天皇と結びつけないようにするのは不自然である。これでは歴史を語るのではなく無機質な考古学を語っているに過ぎない。この時代に日本に歴史がなかったわけではない。現に「記紀」には崇神天皇・垂仁天皇・景行天皇の宮として磯城瑞籬宮しものみずかきのみや、纏向珠城宮まきむくのたまのみや、纏向日代宮まきむくのひしろのみやが存在したと記されている。二千年前のものがこれだけ残されており、且つ「記紀」にはこれに符合する物語が書き残されている。これを素直に読めば、この時代の日本の正史が浮かび上がってくる。また、出雲地方の荒神谷遺跡からは銅剣三五八本、銅鐸六個、銅矛一六本が出土し、これらの製作年が皇紀六〇〇年代(前一世紀)であるから、この崇神天皇の御世である。そしてこの時期、すぐ近くの加茂岩倉遺跡からも三九個の銅鐸が出土している。出雲振根の物語と符合しているのである。

疫病を鎮めたり、武埴安彦の謀反を見抜いたりと大活躍された倭迹迹日百襲姫命は大物主神の妻となられるが、この神は夜だけ来て昼は来られない。そこで姫は「あなたは昼はお越しにならないのでお顔を見ることが出来ません。今日はもう暫くいて下さい」と願うと大物主神は「それでは明朝貴方の櫛箱の中に入ります、私の形に驚かないで下さいよ」といわれる。夜明けを待つて櫛箱を見るとそこに小蛇がいたので姫は驚いて叫んだ。大物主神は「お前は我慢できなくて私に恥をかかせた、今度は私がお前に恥ずかしい目をさせよう」と言って大空を飛んで三諸山(大神山)に登られる。姫はこれを仰ぎ見て悔い、ドスンと座り込んだとき、箸で陰部を撞いて亡くなってしまふ。それで姫の墓は箸墓と呼ばれる。

崇神天皇の御世から、朝鮮半島や大陸との関わりが出てくるが、半島南部はこの時代から、或いはそれ以前から倭人が支配していた。半島南部は倭国の一部で、倭国に朝貢している。半島の正史『三国史記』や支那大陸の国史書『隋書』などを参照すればこのことは明らかである。半島南部の狗邪韓国(金官国)や任那となる地域は、皇紀五〇〇年代中頃、従来の土器とは様式の全く異なる、日本の弥生式土器が急増し始め、これは後の任那に繋がる地域へ倭人が大挙して進出し、そこに住み着いた結果である。時代は崇神天皇の御世かその前後ということになる。

古新羅の第四代王・脱解尼師今だつかいにしきんや大輔の瓠公ここうが倭人で、その後も新羅は倭人の王が続き、半島南部は倭人の支配地域となった。また半島南部には巨大前方後円墳（日本のものよりは小規模）が多数、日本のものとは少し時代が後になるが存在し、相当な地位の倭人が埋葬されたと推定される。この事実はこれから後の半島と列島の関係を見る上で非常に重要な点である。半島の正史『三国史記』や『三国遺事』、大陸の『隋書』『魏書』『後漢書』などの歴史書の記述と符合するところも多い。

垂仁天皇

第十一代 世系一六 在位九八年

皇紀五九二（崇神天皇二十九〔前六九〕）年、崇神天皇の第三皇子として纏向瑞籬宮まきむくたまのみやで誕生された活目入彦五十狭茅命いくめいりびこいさちのみことで、母は大彦命の娘・御間城姫命みまきりめのみことである。

皇紀六一一（崇神天皇四十八）年四月、二〇歳で皇太子に立てられる。

皇紀六三一（崇神天皇六十八）年十二月、崇神天皇が崩御される。

皇紀六三二（垂仁天皇元〔前二九〕）年一月二日、活目入彦五十狭茅命が四一歳で即位される。

皇紀六三三（垂仁天皇二）年二月九日、開化天皇の第三皇子・彦坐王ひこすまの女むすめで従妹に当たる狭穗姫さほひめを皇后に立てられた。

【纏向時代】

この年十月、纏向（奈良県桜井市穴師）に遷都される。纏向珠城宮跡の石碑が出土しており垂仁天皇の御世の宮であったことが確認された。遺跡の名称は、旧磯城郡纏向村に由来し、「纏向」の村名も垂仁天皇の「纏向珠城宮」、景行天皇の「纏向日代宮」より名づけられたものである。そして、纏向遺跡の発掘により、この地域に巨大都市が存在し殷賑いんしんを極めていたことが分かった。その規模は北隣に栄えた唐古・鍵環濠都市の一〇倍の規模であった。先帝・崇神天皇が都を磯城に移されたときから纏向が日本の都となり、垂仁天皇もその近くに宮を置かれたのである。従って、先